

囲碁川柳(十句)と囲碁との出会い

石川寿囲碁同好会 戸野 敦充

- 1 よく家を 忘れぬことよと 妻は云い
- 2 仕事より 少し疲れる 囲碁大会
- 3 ご無沙汰を 埋めて楽しむ 石の音
- 4 性かなし 白地ばかりが 広くみえ
- 5 追い追われ 我を忘れて 身駄目詰め
- 6 さて「困った」と 云うほど 困らぬ 白の石
- 7 あき深し 頭熱、指寒の 手段かな
- 8 よせ勝負 目算出来ぬ 情けなさ
- 9 戴天を 共に潔(いさぎ) よしとせず
- 10 ポカ嘆く 紫煙の向こうの 友の顔

囲碁との出会いとその頃

敗戦後の復興で造船景気の盛んな頃の昭和 27 年に広島県の因島(いんのしま)に職を得て一年近く住んだ。勤め先は船舶無線の支店で、仕事を頼みに行く日立造船の下請けをしている一人親方の町工場の家に、立派な五寸か六寸の碁盤があり不思議に思っていた。

囲碁は下宿先のドックに勤めている家の人から教えてくれた。戦後間もないころで碁盤は手作りで石は竹材で、黒石はともかく白石は鶯色になり軽いので盤におくと良く動き、指にくっついてきた。竹材の石は軽いから持ち運びを考えて、おそらく戦時中、戦地に送る慰問品として作られたものだろうと思う。

覚え始めのころは夢中で夜いつまでも打っていると「明日は勤めがあるんでしょ、いい加減にきなさいよ」と階下から下宿の小母さんから叱られた。島では囲碁が非常に盛んで、ねじり鉢巻の縁台将棋は見かけず、ドックに勤める工員も囲碁をする人が多かった。

ご存知の人もあると思いますが、かつてアマ強豪で鳴らした故人の村上文祥もここの出身で、同年輩の私の友人の話では村上文祥の実家が、日本棋院の因島支部で囲碁は高校

時代から有名だったようだ。この島を離れてしばらくして本因坊跡目桑原秀策が、ここ
の出身であると知り、囲碁が盛んなのもなるほどと納得した。

島へは今は「しまなみ海道」で車で行けるが、当時は家のある三原から焼玉エンジンの
小さな巡航船でポンポンと云う音を聞きながら下宿へ帰った。晩春のころ沖の船から見
る島の丘陵の、畑一面が除虫菊の白一色の花ざかりであった。この頃は栽培もしておら
ず、除虫菊という言葉すら知らない人も多いのではないかと思う。

その後囲碁は趣味としては一番長く、腕のほうは牛歩の如くでも、少しは進歩あればい
いが、番数ばかり重ねてなかなかさっぱり進歩がない。囲碁がなければおそらくお会い
することもない皆さん方と、地区団体対抗戦や各大会を通して知り合いになれるのも、
囲碁のおかげで、この碁縁をいつまでも大事にしたいと思っております。

(碁楽連だより 10月号 第218号 2009年10月1日)